

「文明の衝突か、政治の失敗か」

酒井 啓子

(要旨)

9-11が発生したとき、世界中は事件に衝撃を受けた。数千人の命を奪うという「虐殺」自体は、世界の長い歴史のなかでいくつもの例が見られる。この事件が世界を震撼させたのは、初めて、非先進国の出身の人間が、先進国の、しかも政治経済の中心とみなされる象徴を攻撃したことである。

言い換えれば、これまで「北」が、その圧倒的な政治的、経済的、軍事的パワーをもって、「南」に衝撃を与えることはあっても、その逆は9-11が始めてだったといえる。そしてその攻撃が、「テロ」という形を取ったのも、「持たざる者」が「持てる者」に対して対抗する手段として同等の軍事的手段を持たないがゆえのことである。

歴史のなかで見られる「テロ」行為のほとんどは、「持たざる者」が唯一の手段として自らの体を武器にする、あるいは一回の攻撃でその数倍の恐怖を与える「テロ」を、自らの社会内部の「持てる者」に対して行ってきたものであった。だが、9-11以降の世界に拡散している「テロ」の多くは、国外の「持てる者」を標的とするところに特徴がある。

ここで問題にすべきは、第一に、なぜ社会や国といった枠組みを飛び越えて、他国・他の社会に「テロ」を行使するのか、ということである。「北」に対する「南」の憤懣、社会的不公正に対する反感、経済的支配に対する反発といった対立項は、植民地時代から存在していた。しかしそれが、先進国の「南」での出先機関（大使館や駐留基地）に対して行われることはあっても、「北」の生活空間に対してなされることはなかった。

このことは、さまざまな意味で、「北」の生活空間での攻撃を実現できる能力を、「南」が有するようになった、ということである。技術的な攻撃能力やそれを支える資金はもちろんだが、情報の世界中での共有、メディアのグローバル化が果たす役割は多い。これまで、世界のどこでどれだけの「南」の人々が「北」の支配の被害にあっていたようと、それが「南」の住民の多くには知られていなかったのに、メディアの発達によって、広く不公正感が共有されるようになったのである。

もうひとつの問題は、これらが果たして「北」対「南」、つまり文明間の対立なのか、「北」、つまり西欧世界内部や「南」、すなわち中東などの非先進国内部の対立なのか、ということである。9-11の実行犯であるムハンマド・アタがドイツでの留学中にアルカーイダに加わったことはよく知られているし、また2005年にロンドンで発生したバス・地下鉄爆破事件は、イギリス在住移民二世である。「テロ」ではないが、2005年後半にヨーロッパ各地に広

がった移民暴動もまた、移民二世の若者による暴動であるし、デンマークの新聞が預言者ムハンマドを戯画化したことで発生した今年始めのムスリムの反発は、ヨーロッパで起きた問題がムスリム社会全体に広がったものである。

現在発生している「テロ」の多くが、宗教的には「イスラーム教徒」によって行われていることから、しばしば「テロ」の源にイスラームと西欧社会の対立がある、といわれがちである。しかし、ムハンマド・アタにせよ、ロンドンの爆破犯人にせよ、ヨーロッパのムスリム移民にせよ、もともとイスラームに造詣が深い伝統的なイスラーム教徒が西欧との接触によって反感を持ったというよりも、西欧的近代世俗世界で育ち、そのなかで社会の辺境に追いやられた憤懣のなかから、新たにイスラームを発見していく、という経緯が見られる。つまり、「テロ」に走る若者たちはまず自分たちの所属する社会に対する不公正感を抱え、その不公正感のなかで新たなアイデンティティとして「イスラーム」を見出していくのである。本報告は、「文明の衝突」ありきではなく、社会的な不公正感を解決できるような政治的機能が、出身国であるイスラーム諸国にせよ移民先社会にせよ、各国レベルでも、国際政治のレベルでも、きちんと果たせていないことが、「テロ」を含めたムスリム社会の最大の問題だと考える。

参考資料

- 1 小杉泰『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会、2006年
- 2 エドワード・サイード『オスロからイラクへ』みすず書房、2006年
- 3 四方田犬彦『見ることの塩』作品社、2005年